

石井忠雄作 戦争ドラマスペシャル

## 「沖縄物語 一傷跡一」

<前編>

(音楽) (さわやかな明るい感じ)

宮里洋子ナレーション 空から見る沖縄は、エメラルドグリーンの海に浮かぶ、美しい島です。飛行機が高度を下げるに従い、なだらかな丘陵が広がり、亜熱帯の植物の間に、沖縄独特の赤いカワラ屋根のどっしりした家並みが見えてきます。周りの座席にいる若いカップルたちは、歓声を上げ、楽しい旅に胸を躍らせているようです。わたしは宮里洋子、43歳のクリスチャンの主婦です。わたしの両親は沖縄出身ですが、わたしは物心ついたころには東京にいたので、それほど沖縄には関心は持っていませんでした。それに父は、わたしが生まれてすぐ死んでしまったし、母は、一言も沖縄のことは話してくれませんでした。そのわたしが沖縄にかかわり始めたのは、ある忘れられない一つの出来事からでした。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション それは、今から25年前、わたしが中学を卒業して3年たったころでした。わたしはある工場の事務で働いていました。

大城ふみ子 ごめんください。

ナレーション ある日、わたしの事務室に、一人の女の人が訪ねてきました。彼女は、二十歳は過ぎているようでしたが、やせて背が高く、頭にヘンてこな帽子をかぶっているのが目につきました。

洋子 はい、なんでしょうか？

ふみ子 わたし、お金を落として困っているのです。少し貸していただけませんか？ 母が病気で、すぐ郷里に帰らなくてはならないのです。

洋子 おうちはどちら？

ふみ子 静岡です。帰りましたら、すぐお返しします。電信為替で送りますから。

ナレーション 結局わたしは、1,000円を貸してあげました。その時、その女の方はメモ用紙に、勤務先の名前と住所、そして“大城ふみ子”と自分の名前を書きました。それが彼女との出会いでした。

それから1か月過ぎても、大城さんは何も言ってきませんでした。

洋子の母 洋子ちゃん。大城さんから何も言ってこないの？

洋子 うん。お母さんの病気が重くて、それどころじゃないんじゃない？

母 そうね。大城という名字は、きっと沖縄の人ね。ま、大丈夫よ。沖縄の人に悪い人はいないわ。

洋子 でもわたし、なんだか心配だわ。勤め先に行ってみようかな。

母 洋子、決して疑ってはいけないよ。でも、もし困っているといけないから、行っておあげ。

洋子 大城さんが書き残した勤め先は、下町にあるお菓子を作っているお店でした。

(効果音) (店のドアの開く音)

洋子 ごめんください。

主人 はいはい、いらっしやい。何を差し上げましょうか。

洋子 いいえ。買い物じゃないんです。こちらに大城ふみ子さんはいらっしやいますか？

主人 大城さん？ いや、そんな人はいませんよ。

洋子 でも、確かに自宅に働いていると聞いたんですが。

主人 ちょっと待ってくださいよ。お母さん、うちにいた女の子、なんていったっけ？ え？ 大沢？ 大沢ふみ子？ そうそう大沢ふみ子だっけ。いやね、3年ほど前に、その子が「働かせてくれ」って来たんだよ。頭に大きなケガをしていてね。「どこでも使ってくれない」ってね。あまりかわいそうなんで置いてやったんだが、なんか陰気な子で、店の若い者に頭のことをからかわれて、怒ってふいっと出ていっちゃったんだよ。ところで、あんたはあの子の知り合いかい？

洋子 いいえ。わたしは、ちょっと…。

主人 あの子、沖縄だと言ってたけど、ダメだねえ、あんなことぐらいで逃げ出すようじゃ。

ナレーション わたしは、おじさんの言葉を聞いていて、大城さんに違いないと思いました。そして、彼女には何か深い訳があるような気がしました。するとわたしは、沖縄と大城さんのことがとても気になり始めました。それから半月ほどたったある日曜日、教会の礼拝から帰る途中、パチンコ屋さんの前を通りかかると——

(効果音) (パチンコ屋の騒音)

パチンコ店員 この野郎、ふざけやがって！ 店の景品を盗むなんて、なんてやつだ。なめやがって！

ナレーション それは大城さんでした。あのヘンてこな帽子をかぶった彼女が、パチンコ店の前で何人かの店員に袋だたきに遭っているのです。見物の人垣ができてくる中で、やがて大城さんの帽子が落ち、頭がむき出しになりました。その頭の真ん中には髪はなく、何かで切りつけられたように大きく割れているのが見えました。大城さんの周りには、盗んだと思われる食料品の包みが転がっていて、大城さんは何か大声で叫んでいます。

洋子 大城さん！（店員に）すみません。この人、わたしの知り合いなんです。どうぞ赦<sup>ゆる</sup>してあげてください。

店員 あんたの知り合いかい。商品をこんなにされちゃ困るんだよね。弁償してもらえねえかな。

洋子 はい、分かりました。わたしが代わりに弁償します。

店員 そうかい。それはどうも。それにしても、お前、その頭はどうしたんだい？ ほかに男つくって亭主にでもやられたのかい、え？

ナレーション わたしは、ハツとして大城さんの顔を見ました。彼女は唇をぐつとかみ締め、青い顔をして、じっと耐えているようでした。わたしは思わずその店員に向かって――

洋子 あなたたちは、人の不幸がそんなに面白いのですか？ あなたたちが、この人の立場に立ったら、どうですか？ 今みたいに笑えますか？ 大城さんだって、好きでこうなったんじゃないと思います。謝ってください。

店員 おれたちはそんなにモテないからね。それに、悪いのはこの女じゃないか。謝ってもらいたいのはこっちだね。商売の邪魔なんだよ。さあ、どいた どいた。

洋子 あ、お金を払ったんですから、品物はこの人に…。

店員 なんだい。品物が欲しいなら、パチンコで取るか、もっとお金を出しな。これは高級品だから、安売りはできないんだよ。

ナレーション わたしは、足元を見られてしまったのです。大城さんは、道路にうづくまるようにして、泣きむせんでいました。

ふみ子 (泣き声)

洋子 大城さん、どこかケガはありませんか？ さあ行きましょう。わたしの家、この近くなんです。

ナレーション 大城さんは、やっと立ち上がると、泣きじゃくりながら歩き始めました。彼女の頭を見て、「スゲえ」という声が聞こえます。その度に大城さんは、肥えのするほうを無言でにらむのでした。

(効果音) (洋子の家の戸の開く音)

母 洋子かい？ お帰り。今日は遅いのね。

洋子 ただいま。お母さんは早かったのね。婦人会、もう終わったの？

母 洋子ちゃんみたいに道草しないからね。あら、お客さん？

洋子 大城さんよ。

母 ああ、あの大城さん。ようこそ。話は洋子から聞いていますのよ。さあ、どうぞお上がりくださいな。狭くって。でも遠慮は要りませんのよ。洋子ちゃん、大城さんに上がってもらって。

ナレーション 母の陽気さに、大城さんの心は動いたようで、誘われるままに家に上がりました。そして、わたしたちと夕食を一緒に食べたのです。その時のお話でした。

母 大城さん、静岡のお母様の病気、いかがでしたの？ 洋子から聞いて、心配して、お祈りしていましたのよ。

洋子 お母さん、それ言わない約束でしょ。大城さん、気にしなくていいのよ。

ふみ子 いいえ、いいんです。ごめんなさい。わたし、ウソをついていたんです。わたし

には母はいません。日本の軍隊に殺されたんです。“日本のために”って。でもわたし、悔しい。どうしてわたしが、こんな目に遭わなければいけないんですか？ 日本は、“本土を守るために”って、沖縄の戦争を長引かせたっていうではありませんか。もっと早く戦いをやめていれば、わたしの母も死なず、わたしも、こんなにならなくてもよかったのに。沖縄人は、昔から命を大切に、戦いを好まないと聞いていました。その沖縄人に、あんな恐ろしいことをさせて、そして、そして…。(絶句)

あなたたちは、幸福に暮らしているから分からないでしょうけど、わたし、好きでこんなことをしているんじゃないです。

母 大城さん。そうね、あなたの気持ち、よく分かるわ。

ふみ子 分かるもんですか。

母 分かります。わたしも沖縄出身で、あの戦争を体験したのです。

ふみ子 え？

ナレーション わたしは、その夜、母から初めて狂気のような沖縄戦の様子を聞きました。そして、大城さんからも、今までに味わったことのない、衝撃の物語を聞くことになったのです。

#### <後編>

(効果音) (戦闘音)

ふみ子ナレーション 沖縄で戦争が始まったのは、1945年(昭和20年)3月26日、敗戦の約5か月前でした。アメリカ軍は、沖縄本島より西方10キロメートルのところにある慶良間諸島に無欠上陸しました。この慶良間諸島の渡嘉敷島で、3月28日、300人もの住民が集団で自決するという事件が起きました。やがて、同じことが自分の身にも降りかかろうとは、神ならぬ身の知る由もないことでした。4月1日、更に進んで沖縄本島の西側、北谷に上陸したアメリカ軍は、そこから北上して北部の山岳地帯を攻撃。そして5月に入ると、日本沖縄首尾軍司令部のあった首里を攻撃の目標にしてきました。5月22日、それ以上持ちこたえることのできなくなった日本軍は、島の外れの喜屋武半島へ撤退を始めたのです。歴史上で初めての近代戦を体験した住民は、なすすべを知らず、激しい戦闘に巻き込まれていきました。わたしの住んでいた首里も、激しい砲撃によって、家も、木立も、文化遺跡も、次々と破壊されてしまい、人々は友軍を頼って南下し始めました。昼は砲撃が激しく、戦車に見つかるため、夜の暗やみに乗じて移動します。雨の季節で、降りしきる雨の中を、親せき・縁者が固まって行動しました。その時、わたしは5歳でしたが、母に連れられて一緒に歩きました。沖縄南部には、ガマと呼ばれる自然洞窟がたくさんあります。そこは、住民の格好の避難場となります。わたしたち一族も、手ごろなガマを

見つけて、そこに避難することができました。そこに間もなく、数人の日本軍兵士が入り込んできました。

兵士

隊長。これは手ごろな壕ですね。

隊長

よし、これはよい。すぐ皆を呼んでこい。あ、ちょっと待て。その前に、ここにいるやつらに言うておくことがある。我々日本軍は、お国のために戦っておる。この戦は、なんとしても勝たねばならぬ。たとえ勝ち目はなくとも、1日でも2日でも敵の進撃を食い止め、敵に多大の出血を強いて、気をつけ！ 恐れ多くも我が天皇陛下のおわします皇土を守らねばならぬ。そのために、誠に気の毒だが、この壕を明け渡してもらいたい。自分の部下が別の壕で待機しておく。

ナレーション

母は必至に叫びました。

母

なぜです？ わたしらが咲きに入っていたのです。ここにいさせてください。

隊長

ダメだ。戦闘になれば、お前たちは足手まといになる。自分たちは、お前たちまで巻き添えにしたくはない。別の所へ移ってくれ。

母

でも…。

隊長

くどい。出ろと言ったら出るんだ。なぜお前たちのために我々皇軍が犠牲にならねばならぬのだ？

ナレーション

叔父を始め、ほかのグループの人々も仕方なく、ガマを明け渡しました。外は土砂降りの雨でした。

わたしたちは、再び戦場をさまよい始めました。沖縄には、亀の甲羅の形をしたお墓があります。どのお墓も避難民でいっぱいです。わたしたちは、砲弾の飛び交う中を、まるで夢遊病者のように歩き回りました。そして、沖縄の南端にそびえる摩文仁ヶ丘を回り、海岸に出た時、わたしたちは目をみはりました。海は、アメリカ軍の軍艦であふれ、海岸には、日本兵や住民の死体がゴロゴロしているのです。わたしたちは、もう自分たちが行くべき所がないことを知りました。それでもなんとか生きようと、近くのカマを見つけ、そこに避難をしました。そこには住民と兵士がすでに入っていました。時折、戦車が近寄ってきて、「出てきなさい」と呼びかけていきます。ガマの中は広く、ゆったりとしていましたが、食べ物は何もありませんでした。忘れもしません。その日は、1945年（昭和20年）6月20日。日本沖縄守備軍司令官、牛島中将と長参謀長が、自決する2日前のことでした。・わたしたちは、一人の日本軍将校の命令を聞いていました。

将校

我々は、戦うだけ戦った。皆も軍によく協力してくれた。しかし、神州は不滅である。我々の志は、だれかが継いで、きっと我が国に勝利をもたらしてくれよう。そこで我々は、ここで潔く自決し、敵に日本人の心意気を見せようではないか。我々軍人も、使命を果たしたら必ず行く。お前たちだけを死なせはしない。おい、皆に手榴弾てりゅうだんをあるだけ配れ。手榴弾の数に限りがある。お互いに固まり合

い、合図で信管を抜け。よいな？

ナレーション わたしたちも、叔父を中心に集まりました。その時は、不思議と死が恐ろしくありませんでした。皆は絶望のどん底にいましたし、もし敵の捕虜になれば、辱めを受け、殺されると教えられていたのです。

将校 抜け！

(効果音) (爆発音)

ナレーション 激しい爆発音。そして程なくあちこちで、泣き声や叫び声が起きました。

声1 クルチクミソーレ(殺してください)

声2 タシキティクミソーレ(助けてください)

ナレーション わたしは目を開けてみました。周りに何人かの人々が死体となって転がっていました。叔父の手はもげて、骨がむき出しでした。妹の恵子の首ももげて、胴体だけが転がっています。そして、母は、わたしのそばでうめいていました。その母も、足はもげてなくなっています。そのほかにも、死に切れなかった人たちが、のた打ち回っています。その時でした。何人かの日本軍の兵士が、苦しんでいる人々をナタやオノで殺して回り始めたのです。そして、わたしたちのほうに近づいてきます。その時になって、わたしは死が急に恐ろしくなってきました。

兵士 お前ら、まだ生きていたのか。生きていて皇軍の秘密が敵に漏れたらどうするか。お国のために死ぬんだ。

ナレーション その時、わたしは母Hのはらわたを振り絞るような声を聞きました。

母 ふ… ふみちゃん、逃げて！ ギャー～！

ナレーション 次の瞬間、わたしも頭に衝撃を受け、それっきり気を失ったのです。

洋子 …恐ろしい話ね。それにしても、ひどいことをするわね。味方を守るのが兵隊さんの務めじゃない。それを殺して回るなんて…。大城さんの頭の傷は、その時の傷なのね。それなのにひどい。皆でバカにして。

洋子の母 大城さんは苦労なさったのね。でも、その傷をあなた一人で負うには重すぎるわね。イエスさまは、「重荷を負うものは、わたしの元に来なさい」って言うのよ。

ふみ子 それは、おばさんのように幸せな人の言うことです。わたしのように不幸な人間に、救いなんてないわ。

母 大城さん、それに洋子も聞いて。わたしだって、決して幸せな人生を歩んできたわけじゃないのよ。わたしも、あなたと同じ集団自決の生き残りよ。それにわたしは、自分の子供の首を絞めて殺した人間なの。

洋子 え?! お母さん…。

母 それは、洋子がまだおなかにいたころのことなの。わたしは、姉の幸子を連れて、避難をしていました。わたしたちも追い詰められ、村長さんの命令で自決

することになったのです。あちこちで手榴弾が炸裂し、死に切れない人は、互いにカマヤオノで殺し合いました。わたしも幸子もかろうじて生き残りました。でも、その残った幸子の首を、わたしはこの手で絞め殺したのです。まだ5歳でした。幸子は、「お母さん、苦しい…」と言って息を引き取りました。その時は、皆そうでした。追い詰められて、頭の中が、まるで死に神に取りつかれたようで、生きてはいけないうように思っていました。でも本当は、子供は違うんですよ。子供たちは何も分からず殺されていったのです。日本人らしい名誉の自決だと思われていますが、そんなのはウソです。でもわたしは、仕方がないと思いました。わたしも死のうとしましたが、できませんでした。東京に来て、あの出来事を忘れようとしたのですが、決してできはしません。あの忌まわしい思い出は一生消えません。わたしは、わたしをこんなところに追い込んだ人たちを憎みました。憎んで 憎んで、もう気が狂いそうでした。そんな時、わたしは、近所の人に誘われて、教会に行くようになりました。牧師さんにお会いして、聖書を学びました。イエスさまは、わたしの苦しみのすべてを知っていて、受け入れてくださる。そのイエス様が、わたしの心の重荷を共に負ってくださると知った時、わたしは、今までの肩の荷が下りたような気がしたのです。イエス様を信じて、わたしも分かったんです。人を憎む心、自分だけを守ろうとする心、これが罪なんだ。イエス様の十字架の死は、このわたしの罪のためでもあったんだって——。

ふみ子 ……そうだったんですか。人間なんて、極限状態に置かれると、本性を表すものですね。よく考えてみると、わたしもあの時、自分が助かることばかりで、妹や母のことは少しも考えていませんでした。わたしは、それを考えるのが怖かったのかもしれない。わたし、人のことなんか言えませんよね。

洋子ナレーション あれから25年の歳月がたちました。大城さんは、その後、教会に行くようになって、イエス様に自分の重荷を預けました。今では同じクリスチャンの方と結婚され、沖縄に住んでいます。わたしは、その大城さんに会いに、今、この地を訪れたのでした。軍・民間共同使用だという那覇空港には、3年前に生まれたルツちゃんという女の子を連れた大城さんが迎えに出ておりました。その平和そうな姿を見たわたしは、改めて思いました。——戦争は、人間のエゴイズムの罪の結果起こるのですが、もしわたしたちがそのことに気づかなければ、また、いつ、この地が戦場にならないとも限らないのです。この罪がもたらす“敵意”という隔ての壁を打ち砕くのは、イエス・キリスト様の福音しかないのです。

その時、わたしの目の前を、自衛隊の大きな輸送機が、爆音高く舞い上がっていきました。——

(効果音) (飛行機の離陸音、FO)

<完>